

特 251

357

485

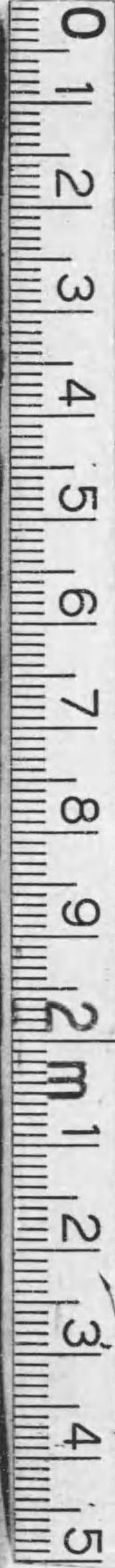
526



天 下 の 絶 勝

淡 路 西 浦

郡 家 の 美 語 を 語 る

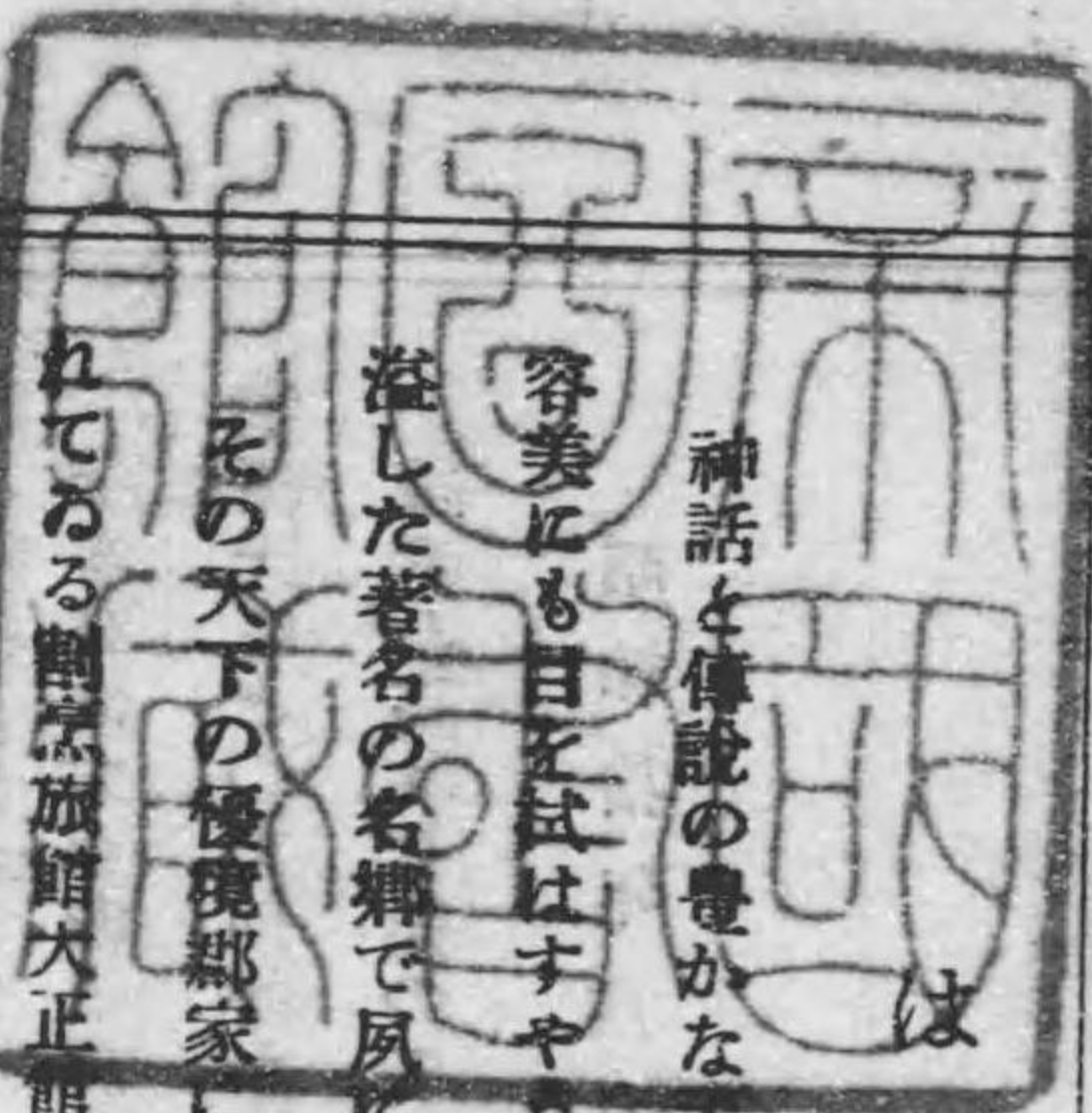


始



3

4



しがき

神話と傳説の豊かな入下の絶勝、淡路西浦郡家の持つ秀麗限りなき郡家の濱の海洋美にも山容美にも目を試はずやうな明媚な勝景、しかも京阪神に最も近く町は新興の意氣に充ち活氣横溢した著名の名郷で夙に我國の遊覽探勝の最適地として郡家の名が全國に普く鳴り響いてゐる。その天下の優境郡家に偉風堂々として君臨し、遊覽、探勝の人達から萬雷の拍手を以て喜ばれてゐる剛氣旅館大正館の名聲は餘りにも有名である。その大正館の名は多くの人達はよく悉知してゐるもその輪廓と内容とそうして大正館への交通を知らず、それを知らんと欲して街上に適當なる案内書を求めんとするもいづれもその一部分のみなるに失望し、郡家の勝景と大正館の親切な案内書なきを嘆くもの甚だ多い、これらの需用に迫られて本書が産れたのである。



郡家の美と大正館に就ては既に先輩諸氏が踏破せられ各々金玉の紀行文あり、いづれもあやめと咲き亂れ、文筆を修めず、文字を知らぬ私の紀行の如きは固より人に示すべきものにあらざる事は私もこれを識つてゐる。

唯本文は大正館と郡家の一木一石について正確にしてあるかこの點だけは旅行、探勝、遊覧家諸氏にとつて何等かの御参考になれば私の希望は達した譯である。

讀者の高教を俟つて更に完璧たらしめたい諸賢の諒承を冀つて置く。

昭和拾年六月

後に山を負ひ前に蒼波を抱く郡家にて

原 静 村

天下の絶勝郡家の美を語る

原 静 村

「来て見ればサ程でもなし富士の山」とはよく穿つて皮肉な名句として人々に膾炙してゐる。

私も旅行家の末席に連なつて屢々名勝を跋涉して見たが、大抵は此の句のとほり、大袈裟な評判ほどでもなく實際に遭遇して失望したことが一再ではかつた。

史と傳説、趣味深く面白い郡家の山と海の奇勝についても屢々會遊者から聞かされてゐたけれども、矢張り餘り多くを期待してゐなかつたのと生來船に弱いので海上旅行が臆劫であつたが、遊意勃然として禁ずることが出来なくなつて來たので旅装も匆々大阪を發つて、多年憧憬の郡家の美を探りに出懸けたのである。

サテ出懸けて見れば臆劫と考へられてゐた、そうして嫌いな船の旅は臆劫どころではなく却つて陸路の旅行よりも氣樂で安全で旅費が低廉で愉快であつた。

郡家港に上陸して交通状態を審さに調べて見ると實に驚いた。郡家を縦横無盡に交通網は完備してゐる、郡家附近の名勝を探るにも多少は膝栗毛は豫想して行つたものゝ、遂にそれを驅つて見る機會もなく、船から自動車へと交通は行届いてゐる。

私は去る二十七日（日露海戦三十週年記念日）大阪築港棧橋午前七時半發の優秀新造船超モダンの新淡路丸に乗船した、船は明鏡の様な靜かなエナメルドの茅渚の浦を亘つて明石海峡を経て播磨灘の初夏の光りと色彩、澄み渡たる碧空、その明快調、幻想思慕とに忘れ難き詩の淡路西浦の郡家そこにタツブリ溢れた歡樂の船室、斬新なる設備と瀟洒なる裝飾に於いて、豊かな旅情とを満喫され、船は十二湮の超スピードで幕進する。

いつしか須磨や舞子を右手に眺め明石海峡を過ぎ前方遙かに小豆島を臨んだ、船は尙も幕進を續

ける、初夏の陽光靜かな波の中を花のやうに落ちてくる千鳥、船首に碎くる波の光、そのさゝやきげに天下のユートピアである。

船が郡家の港に着いたのは午前十時頃、船嫌ひの私も今日の楽しい爽快な海上旅行と處女のような新淡路丸の魅惑にひきつけられて一度でスツカリ船が好きになつてしまつた。

斯くして私は多年憧れの郡家に第一步を人れ憩ひの後同地並びに附近の名勝舊蹟を巡遊してその夜は都會とかげ放れ、一切の繁雜から解放され靜寂の大正館に一泊した。淡路島の史蹟を探り、名勝舊蹟を訪ね、風光を巡る人達に郡家遊覽コースのプランをたてゝみる。

新興の郡家

郡家は山と海の幸がガツチリミ握手した自然美に恵まれ、淡路西浦に於ける文化の發祥地で今や人生のオアシス建設に幕進し新興の意氣に燃ゆる町である。



(景 全 町 家 郡)

町は古風で素朴で如何にも島の町らしい落ちつきのある町であるが、それでどことなく媚めかしいところのある親しみに満ちた町である。

町の北方には城中山三州園の老樹が蔚然として青葉若葉が頭上に覆さつてゐる。西北には金波銀波が打寄する静かな播磨灘に面して全町は真に文字通りの風光明媚の町である。

町には我が歴史に著名の名勝舊跡が多数にあり、我建國の大本なる官幣大社伊弉諾神社が當町より十町余のところにある。

郡家の自然美

郡家は淡路西浦の玄關である、後ろには一帯の翠巒屏風を樹て、前には呼べは應へん蒼い海に映ゆる美の小豆島が夢の如くに浮んでゐる。淡く須磨や舞子明石を望みその優艶明媚、飽くを知らざるの風光は断じて他の追隨を許さないほどに郡家の持つ雄大秀麗は淡路を訪ねるもの、讚嘆の聲でまたその聲によつておのづと遊覽探勝に、参拜、魚釣りの人々が集り來るのである。

その人々のために如何にこの郡家が自然美を具備してゐることであらう。その天然の持つ自然美こそ是非一度は出懸るべき所である。

郡家の自然美！いま郡家は新緑満天……初夏の太陽は朗らかな新緑の香りを愛嬌よく蒼い海と山に充滿してゐる。青い空、紺碧の海、波頭を白く碎いて進む船、波の上を渡つて來る播磨灘の風は清々しく、そうして肌觸りがなんとも云へない女性的の感じがする。大氣は澄んでゐる城中山の青

さ、大氣までもその青さに染んでゐる、海邊は清く美しい海底の眞砂や石を一ツ一ツと數へられ、碧く澄み透つた海の中に泳いでゐる魚がその優姿を見せてゐる。

☒ ☒ ☒ ☒

海も山も靜かに呼吸してゐるやうだ、折々波上を渡つてくる風は海と山の呼吸する息とも思はれる、その濃緑の肌が日光に照り映ゆる様は山と海との微笑とも受け取れて嬉しい。山と小豆島の泰然として動かぬ様は永遠の平和を胸に收めてゐるやうにも考へられる。

しかもその眺望は實に佳い、明石方面より郡家を見渡した風景も佳いが、郡家から小豆島や本土の須磨舞子明石の海岸を眺めた風光は眞に佳い。私は黄昏の爽やかな微笑に吹かれて一岬一灣、白砂の海濱を歩いて見た。海は夕陽を浴びて水が光つてゐる。オ、……碧い海、蒼い水、青い山、清澄な大氣、なんと云ふ魅力のある町だらう。

☒ ☒ ☒ ☒

海岸づたひに城中山公園の裾を歩いて見た。町の北西端のところに海水浴場としては理想的の場所がある。土地の人の話では此處へ都會の人達が海水浴に來るので夏は大變な賑ひを呈すそうである。海岸に沿ふた少し手前の村道をトボ／＼とたどつてゐる巡禮、青葉と若葉が家一杯に繁つた茅舎の庭に立つて無心に眺める手足に豆作る質朴な女房達、炊煙立ちこむる谷間の聚落、岩上に魚釣る老爺、網を投じてゐる若者、磧に俯伏して衣を洗つてゐる乙女、川の畔に草を喰む猪牛、眼をぐるりと廻せば白玉を砕いたやうなその砂の一粒／＼の光つてゐる砂の上にべつたり座つて砂を掌に握つては滲し、滲しては握つてゐる染緋を着た島の娘さんの純情には私は心を傷めた、それらの一瞬にして轉變する郡家の黄昏の氣分の豊かな景色、實に悠揚たる寛懷に人を親しましめて氣持をノンビリとさせて呉れる。その自然美の中を紫煙を煙らしながらの散策は眞に郊外生活の宮殿である。こんな自然の平和なのんびりした自然境は京、阪、神、附近では他に一寸味へない仙境である。

郡家の夕陽

郡家の夕陽は實に天下の夕陽である。大正館の島津氏がぜひ一度郡家の夕陽を

観ないか、この夕陽を観ないで天下の夕陽を語ら資格がないと言はれたので私は妙京寺の入相の鐘の音を聞きつゝ夕陽正に郡家の濱に傾き、殘光が地平線上に曳きつるころ砂上に立つて夕陽が海の彼方に落ちんとするを拜した、小豆島や四國の山と海とが眞ッ紅な血の海と化してゐる、眞に壯美の上に超越して至大至高の神靈を體表する趣があつた。餘り夕陽が美しかつたので大正館の女中さんにその美を語つたら『とても良いでせう、碧い海にだん／＼とお日さんが落ちてゆく壯美は全く神秘的でせう』と語られた。

春の郡家 春の郡家の四邊一面の野に山にも梅も桃も櫻も咲き亂れ、若葉と青葉に薫風が面を叩き郡家川の斷崖に生へる雜木に枝垂れかゝる山櫻、黄金色の野生の山吹、唐紅いに燃ゆる原生のつゝじ、藤花の紫白が松ヶ枝に垂れるもまた一入の美しさである。

大空を戀ひ慕ふ雲雀の一聲は天女の奏する音樂のやうである。野には蝶も舞へば田の畔には一片の蛙聲、雨にも似たる風情がある。

夏の郡家 郡家は夏を知らぬ極樂境である、郡家の大正館は盛夏の暑さをさけるには絶好の避暑地である。終日播磨灘を渡つて來る風は清々しくそうして肌觸りが何んともいへない女性的の感じがする、郡家は避暑地として第一條件である涼しさが都會の炎熱都市に比較して確かに五六度攝氏が低く夜分などの散歩には夏といふ感じが少もせない。それに空氣が頗る清淨、濕氣も非常に少なくそよ吹く海と山の風の爽さといふたらなんとも例へ難い氣持がよい、清淨な空氣と太陽の紫外線から遮斷され騒音ミジャズと煤煙の下でビジネス／＼と仕事の重壓の下に働いて神經を疲れさせる都會の人達にとつては危険の多い山より靜かな海の自然美に抱かれたローカルカラー豊かな當地こそ此上もなき理想郷である。

郡家川螢のお宿 初夏の宵の景物詩、赤い戀のハンターである螢が己が身を燃やす情火が燦爛として郡家川の清流に流してほの／＼と郡家川の水が眞ッ紅になるほど彩つてゐる。

郡家の夜が訪れて街路樹の間から灯影が明滅する靜寂な世を忍ぶ戀人達は心ゆくばかり戀を語り

恍惚として二ツの魂を自由に遊ばす絶好の場所である。

秋の郡家 變化の多い郡家の山と野の陽春四月も佳いが秋の紅葉の季節もまた格別の趣がある。山と野の常緑樹に混つて黄を含んでゐる、到るところには風に靡く薄萩、桔梗、薊萱、女郎花、石竹が群をなし歩むに絡る蔦かつらが露に濡れてゐる、おく霜に眞紅が滴たる景、綾錦と織りなす紅葉の景觀實になんとも言へない美景である。

郡家の名月 郡家の濱に映する名月は眞に淡路第一の月の名所である、誠に名月として遊覽探勝者が月見る月は郡家の名月である、四邊はいさ靜かにして空は朗かに月の光が清らかに円鏡のやうな播磨灘一面に煌々として照らしてゐる。

蟲の名所 灯影が明滅する頃になれば蟋蟀の哀音は大正館の廣々とした外庭や中庭の植込さては此方の壁、彼方の客室の窓に迫り旅情轉た動く月も冷やかである。

冬の郡家 冬の郡家、冬の大正館は實に靜かで全く死滅の別世界である犬の寢息も聞え

タバコの灰の落ちる音も聞ゆるほどの靜寞な大正館の奥ばつた一室で郡家美人と美酒美肴で淺酌低唱も時にとつてはまた一興である。

郡家岩屋間の大展望

郡家から岩屋へのドライブウェイは郡家から岩屋町に至る海岸街路にて左の方は碧海渺々として白波磯に打ちよせ遙かに小豆島を望み、手の届くやうなところに大船、釣する漁の小船、右は新緑の山嶽が折重さなり直に海に肉迫し白砂青松の幾多の長汀曲浦の青海原、波靜かにして白鷗が所在なさまに眠り或は時として萬馬濤を蹴つて地軸を驚かし千鯨沫を噴いて星杓を撼するところもあり或は狂瀾洶湧して天に沖し怒濤澎湃として黒紫の岩礁を噛み轟々吼々恰も百萬の鐘鼓を一齊に撞するに似たる物凄い壯觀に接することもある、或は萱の軒を藏める山里の晝は松風、夜はゲエ〜鳴く鳥の聲よりの外に友なき靜寞の村落あり眞に此のドライブウェイとしてつゝじ咲く春、螢飛び交ふ

初夏草葉にすだぐ蟲の音の秋、月に霞に四季通じて大阪近郷隨一のドライブウェイである。

郡家の海岸美

天下無双の海水浴場

郡家の濱のすべてが風光明媚に富んでゐるが、就中城中山三洲園の裾から北南に至る港灣までの海岸美はもつともよい。

元來郡家の海岸には巖礁らしいところは少しもない、たゞ白砂渺々で海岸として實に美しいものである。波靜かな晴天の日は長汀曲浦が青海原で、沖には千鳥が所在なさそうに靜かに眠つてゐる長閑な大海原であるが時に荒天でもあれば萬馬濤を蹴つて地軸を驚かし、或は狂瀾洶湧して天に朝し、怒濤澎湃して白砂を暴臨し、轟々吼々として恰も百萬の鐘鼓を一齊に撞するに似たる物凄いと きもある、しかしそれは一年に一度か二度位ひに過ぎず、大抵は海は靜かで一枚の明鏡を展げたやうである。

うである。

春の汐干狩、貝拾ひ頃は郡家遊覽、伊諾井神社參拜の人達は辨當持參でこの清々しい海濱でところ狭しと押寄せて楽しく遊んでゐる。

今は新緑覆ひ重さなつてゐるが萬物紅葉を呈するころには紅、黄の美觀を呈し海邊には香り高い源平石菖が處狭しと咲き亂れてゐる、その美觀、奇觀には京阪神附近にこんな海岸美豊かなところがあつたのかと驚く外なき眞に近畿隨一の海岸美である。

海水浴場

阪神地方の海水浴場で人情、風俗が質朴で四邊に風教上障害になるものが絶對にないので淡路西浦の郡家の海濱は第一位を占むるの理想の地であり、近代人の要求にピッタリと適つた眞に絶好の海水浴場として最近天下にその名を馳せて來た。

郡家の海水浴場の特徴を擧ぐれば

(一) 海面が遠淺であつて婦人子供達にも絶對に危険のないこと、



(場浴水海濱の家郡)

- (一) 波の静かなこと、
- (二) 海水が綺麗であること、郡家濱邊の砂は非常に細かくして石ころなど一つもなく、足のさわりが絹のやうである。
- (三) すぐ傍に磯岩が點々と散在してあるので海水浴に飽いたならば貝類を採るなどの娯樂が多い。
- (四) 以上の如く海水浴場として近畿第一の場所である、港より約一丁城中山の脚下にあり、縣道に沿ふた所で一帯は石砂で海は弓形で遠淺でしかも水は飽迄澄んで蒼い碧い海水の中層に魚の泳んでゐるのがハッキリと見える海水浴は實に郡家濱ならではの出來ぬ郡家の持つ誇りである

此の美に吸ひ寄せられて海水浴、避暑、夕涼み、魚釣り、汐干狩の慰安地として年々遊覽客は増加してゐる。海濱にはあらゆる設備は完備され、無料休憩所、清水洗場も備へられ、尙ほ臨海學會夏季講習會等が開設される、阪神地方の各中、女學校の指定海水浴場として期間中は頗る賑ひを呈し愈々郡家海水浴場の眞價を遺憾なく發揮してゐる。

苦熱の夏の日

ゆつくりと郡家へ

郡家の濱の美しさ、磯邊に生へてゐる一つの草、一つの石、自然科学を教へてゐる。郡家の一木一石は確かに神相を帯びてゐる。濱の眞砂は一つ一つが日光を反射してきらめいてゐる、郡家こそ都會人士が想像だも出來ない神秘的の夏の樂園、人生のオアシスである。

自然にそむける都會の子よ、自然に弓ひかんとする文明の子よ、われらを最も正しく、最も健全

に教へ導くものはわれらの生みの母自然の他はない、苦熱の夏の一日を寛くりと汝等の心のふるさとへ、自然に還れのモットーを高らかに掲げて行け——淡路西浦郡家へ!!

日本一の魚釣りの寶庫

面白いほご釣れる郡家

大阪の樂園、詩の郡家、神話の郡家、傳説の郡家はまた大物釣りの本場として餘り有名になりすぎた観がある、われ／＼はアマチュアである。

風光明媚と史蹟に恵まれた新緑一入鮮かな明朗な郡家の海にどれほど憧憬の想像を馳せたことか……吾々には海底の黄金引揚げ以上、郡家の魚群に食指が動いてゐるのだ。紫あざやかな鱗光、赤い鰭、青い鰭、金色のベラ、ス、キ魚等は道頓堀や千日前の夜が描く五彩のネオンよりも我々には海底の魚姫のパノラマ風景がより潑刺として夢の郡家に躍つてゐたのだ。

私は三時間ほど大正館の小舟を借りて沖へ出て見た、沖と言ふても三四丁だそこで釣を下ろした暫くするとゴツンといふえらい錘の當りだ、一手二手手繰り上げて見るとググウ來た、果して來た揚がつたのはスマキだ、下ろすとまたビク／＼……ゴツンまたスマキ、スマキばかりぢや仕様がないと内心少しく寂寥を感じてゐると少さくカチツといふ當りだ、何かと揚げて來ると、なんと驚いた鮮紅色の眞鯛ではないか「これは珍客」と些か意を強うしてゐるうちに、丁度向に舟を出して釣つてゐた客も盛んに上げてゐる、流石此所は魚釣りの處女だけあつて能く釣れる實に面白いほど釣れる。

ビク、ビク、小手先に感ずる觸感……幾秒間かの後には水面に銀鱗を躍らすであらうもの……ビク、ビク、ゴツン、の瞬間の緊張、糸の先に集中される全神経……こうした快味の三昧境は釣りをせぬ人には想像をだも許されないであらう。

碧い海、青い空、太陽が朗かな光を背一ぱいに投げかけられて、あちらからも、こちらからも悦

びの聲が上がる。

釣りの寶庫はなんと云つても全島随一で静かな入江になつてゐる岬角や所々に屹立する岩礁より婦人や子供でも樂々として釣れる、郡家の魚釣だけは私は責任を以て吹聴出来る。

釣船は大正館専屬の舟、漁夫、道具、餌一切、一定の料金を決めて案内して呉れる他の漁場のやうにボラレルことは少しもないから安心である。

近代人の要求にピッタリ適つた

料理旅館 大正館

郡家は淡路西浦に於ける文化の都であり、絶勝の地である。官幣大社伊弉諾神社御参拜と西淡廻遊の遊覧者が集まる、それらの者の間に方今評判になつてゐる全島旅館中最も信用隆々頗る好評を博してゐるのは大正館であらう。



(大正館大廣間)

大正館は海と山の大自然美に恵まれた風光明媚、天下の勝地として冠たる郡家町に堂々として君臨してゐる。現今一流旅館と云つてもそれは名ばかりで、嘘八百の客引き宣傳で客を引き付ける旅館もあればまた先代のお蔭で漸く老舗を保持してゐる旅館も尠くない。「ホント」の旅館として眞面目さのある旅館は割合に少くないものであるが、大正館は流石に淡路全島唯一の金看板に背かない實に参拜、探勝、遊覧の絶勝地、天下樂境郡家の誇るべき存在である。

淡路代表的旅館にして淡路唯一百八十疊敷大廣間を有する大正館の誇るべき美點は第一營業方針の堅實と飽く

迄お客様本位にて「皆様の旅館」をモットーとし、大正館の真正銘を味はつてこそ初めて大正館たる真隨を知ることが出来るのである。

大正館は決して山師的なことはやらない、何處までも誠心誠意顧客に對して忠實であり、眞面目である。従つて客筋も善く、一度大正館の敷居を跨つた人はキツト二度三度と回を重ねる、それだけに此の大正館は總ての點に於いて勉強し、また居心地が良い譯である。

大正館の本館及び宴会用大廣間の建築は特に保健、衛生上に留意し採光換氣は勿論、春夏秋冬のそれ／＼の設備は細心な注意と周到なる用意を以つてし、然かもその配合の宜ろしき建築美は他の追隨を許さない、自然の植林美を極めた庭園は巧妙に塩梅よく配置されてゐる。

旅館は家庭の延長であるからその大小は別問題で、氣持本位であり、なんと言つても顧客とサービス第一主義でなければならぬ、此の點に於いて大正館は旅する人達の氣持をシツカリと握つて客の氣持とピッタリ合致するやうに心懸けてゐる。

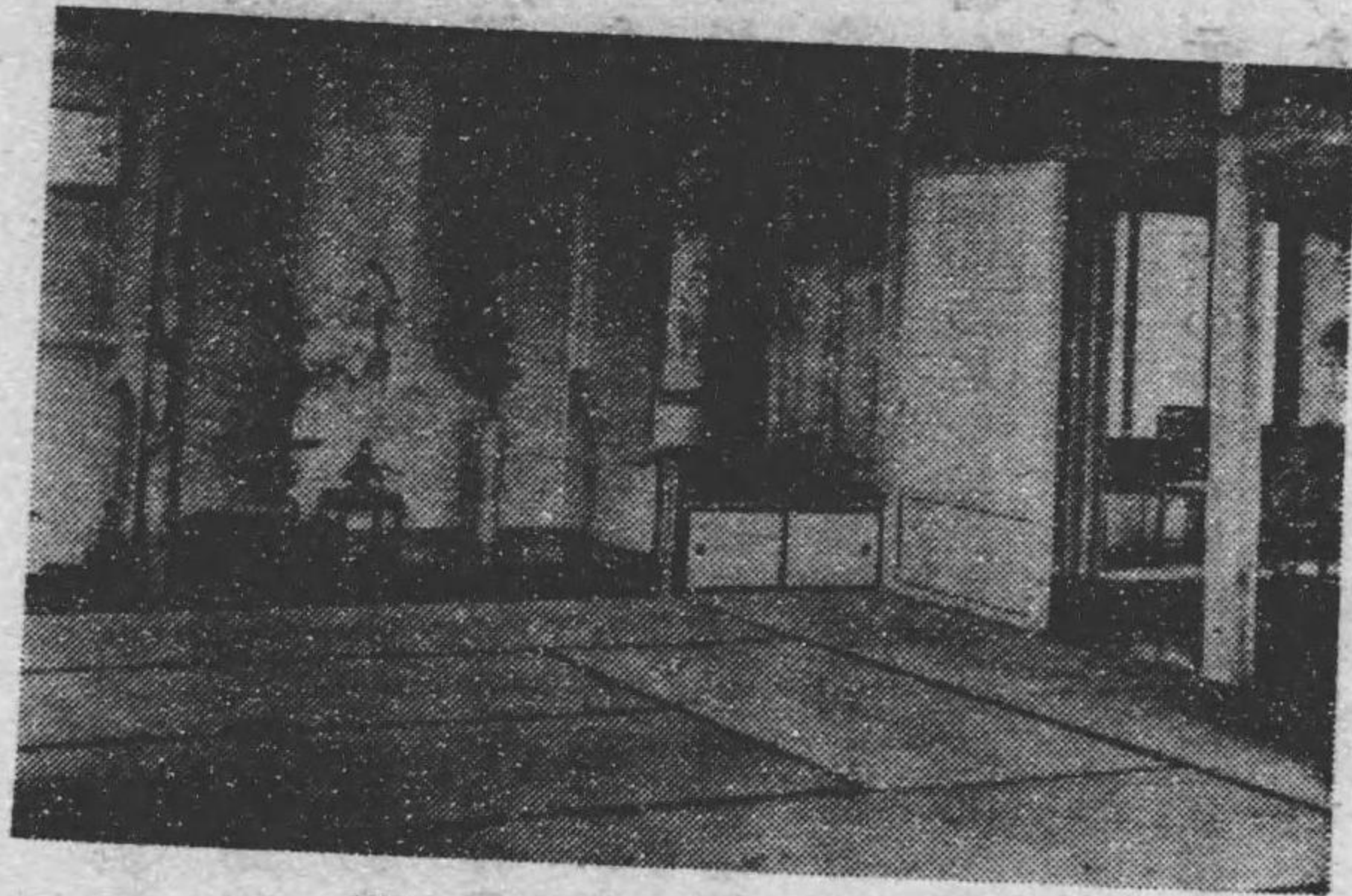
貴賓室の優雅、客室の清潔、粹な浴室、新らしい爽々する寢具は申すに及ばず、便所、洗面室の隅々まで何臭れとなく氣を配つてあるのはなんとなく嬉しい。

尙料理の美味に於いても一流旅館の看板に背かず、とても筆舌に悉くせない新鮮、珍味佳香を食膳に供すので如何なる食通連も舌を巻いてゐる。

なほ、また大正館の仲居さん達はいづれも美人揃ひで愛嬌のあふる情味がたつぷりで痒い所に手の届く様なサービスには眞に親切なる旅館であることが十分にうかがはれる。

旅館の宏大と眺望絶佳と親切丁寧で客から喜ばれてゐる郡家町第一の大正館は何からなにまで整備し、大衆的の居心地良き旅館として激賞され「魚釣り、網引き」海水浴の宿舍等に勉強と親切を以つて接してゐる。

元來大正館の經營者島津淺吉氏は眞面目な人格者で他の旅館業者のやうに無理をしてまで儲けやうなんて頭は少しもない、どこまでも天下の絶勝郡家をして是非お客様の「大正館」と廣く天下に名を



(大正館の間の間)

なさしむべく常に奮闘され、最も堅實な商法で今日まで鍛へ上げた人である。だから大正館のモットーは飽までお客相手の商賣だから、どこまでもお客を大切に、お客の氣に向くやうにといふ風の家憲だからお客たるもの有頂天とならざるを得ない。とにかく感じの良い旅館として近畿で巾を利かせてゐるのもこうした理由からであらう。

尙又大正館は指定旅館として大阪專賣局、第一師團、大阪遞信局、片倉製糸株式會社の愛顧を蒙つてゐる。夏季海水浴には大正館に毎年指定として、亦宿泊された學校名左の通り

神戸市立第一女學校、外神戸の小學校數校、大阪南大江

小學校、大阪北大江小學校、大阪女子師範、八尾中學、東商業等多數に舉がり毎年指定宿泊舎として名聲を博してゐる。

大正館の内容

▽客室、本館大廣間貴賓室 客室二十余室 (別館用地は城中山公園頂上にあり來年夏頃竣成の由)

▽娛樂の設備、娛樂室數室完備

ラヂオ、蓄音器、圍碁、將棋、遊覽船、釣船、魚の生洲、運動器具

▽宿泊料、桐 五圓、松 三圓、竹 二圓五十錢、梅 二圓

(但し團體に限り、竹 二圓、梅 一圓五十錢)

海水浴小學生宿泊 (三食付 六十五錢)

中等學生、女學生 (三食付 八十五錢)

▽御支度 五十錢以上御求めに應ず

▽花見辨當 櫻 五十錢、桃 三十五錢

尙御滞在は一圓五十錢、室付二圓、其他御相談に應ずる由、尙來館の方は前以て知らして置けば店員は御迎ひに向ふ由

▽藝妓花代 一時間税共八十五錢

銘酒 一升 一圓二十錢、白鶴、菊正 一升 一圓八十錢

大小の宴會場として

理想的大正館

全島で宴會客の三百人以上も即座に引受けて手際よく應待然も優れた庖丁の味と氣よさを以つて京阪神の同業者に比し何等の遜色もなく満足と與へ一日の旅塵を洗ひ落してのんびりと山と海の幸

に恵まれ、各種各様の娛樂も備はり、釣魚り、網引き、汐干狩等も出來、温泉もありて靜かに圓るやかな夢を結ばしてくれる旅館といへば全島廣しと云へども大正館の右に出るものはなからう。孤島であるから大小宴會は附物である、藝妓はんと心配する向もあるらしいがそれは御心配無用である。那家は昔から美人の本場として定評がある、島の娘特有の漆黒の髪、玲瓏の情味たつぷりの美妓がゐる、そうしてそれらの藝子が藝は専門とお高くとまつて顔の手人を忘れてゐたんぢや時勢が移りゆく、彼女達も仲々賢明であるから時代の潮流をハッキリと認識してゐられるから宴會は申すに及ばず第二次會も心得て御座る、だから大正館で宴會や運動會を催するのに別段態々經費のかゝる藝子はんを連れて行かなくとも事を缺かさない。

「大正館の美を讚ふ」

清淨な空氣と太陽の紫外線から遮斷され騒音と煤煙の下でビジネス〜と仕事の重壓の下に働

いてゐる都會の人々は、僅か二時間足らずで野趣みなぎる淡路島へ—そこみどり濃き木立に圍まれ播磨灘に臨む渺々たる海と山々の眺めに恵まれ、何の患ひもなく解放されて落着いて一晩ゆつくりと休養の出来る處があつたらどんなにいいでせう、しかもその樂園が自然とよく調和して見るからに氣持ちよく山と海との氣分と文明人の求むる利便とを備へ、ものさびた田園的趣味をたゞへておよそ都會とは、まるで變つた環境と氣分とをもたらすならばどうでせう、その樂境に冷たい清水があり、手の届くやうなところにピチ／＼はねた鮮魚に香り高い野菜が得られるなら、とは近代人の欲求である、この近代人の要求にピッタリと應へてゐるのは大正館である。

何しろ一度大正館に遊んだ人はキツト言ひ合したやうに『こんな大自然美に恵まれた人生の樂境が阪神地方にあつたのか』と一驚を喫すのも敢て無理がない、激しい現代の思想の渦巻の中にある私達都會人には少なからぬ驚異であり、それだけに大正館と言ふところが都會の刺戟に疲れ切つてゐる人々の心をどれだけ撫でさすつて勞つてくれるかと考へさせるのである。眞に俗界を離脱したる

別天地である。

天下の絶勝淡路郡家

大正館行きの交通

天下の絶勝!! 淡路西浦郡家、大正館行きの交通は京阪方面からの方は毎朝午前七時三十分大阪築港大棧橋發の郡家行急行船、新淡路丸に乗船途中神戸中之島突堤に寄港、神戸方面の方もこれに乗り一路寄港なくして午前十時郡家港に着徒歩二丁大正館に達す。

明石方面からの方は明石港午前八時三十分發、西浦線郡家行に乗船、一時間にして郡家港に着く。



明石、岩屋間は午前六時三十分より午後八時迄、一時間毎に發船してゐる。而して此の便に依れば、明石を發して三十分で岩屋港に着く、岩屋港埠頭には郡家行直通の輕快な全淡バスが數臺待構へてゐる。

此所から野島、富島、育波、室津、尾崎を経て郡家まで海岸美と山容美に富んだ絶勝地を僅か一時間足る足らず突走するのである、しかもこのコースは淡路西浦の代表的風光明媚大展望である。尙亦阪神方面より攝陽商船洲本行急行船に乗船して洲本に至り、全淡バスに乗つて淡路東浦の奇勝、長汀曲浦の風光を車窓より賞でつゝ志筑を経て郡家大正館に至るも又ドライブウェイにて愉快百パーセントである。

◎ 大正館使用船は内海の女王!! 超モダン優秀新造船天女丸または新淡路丸 ◎

日 歸 行 樂

官幣大社伊弉諾神社參拜、同境内櫻の花見、名所舊蹟探勝、魚釣り、網曳き、磯遊び、海水浴、大正館にて休養。
なほ大正館では左記へ出張所を設置して居りますから詳細御問合せなさい店員參上いたす由。

(大阪市港區八雲町三丁目七番地 淡路遊覽協會内 大正館出張所 電話西七五九六番)

「大正館の宴遊券」

費用御一人様 (但し新淡路丸)

金二圓七拾錢

大阪……郡家間汽船往復 會席七品外に御飯香の物付
參宮自動車往復御神樂及御守付

金二圓五拾錢

大阪……郡家間汽船往復
會席七品外に御飯香の物付

☒ 毎朝午前七時三十分大阪築港大棧橋發、十時郡家港に着、
御歸りは午後四時半郡家發八時大阪着

費用御一人様 (但し天女丸)

金參圓六拾錢

大阪……洲本間往復天女丸船賃 會席七品外に御飯、香の物付
洲本……郡家間自動車往復

☒ 毎朝午前八時天保山棧橋出帆の天女丸十時洲本着
御歸りは午後六時洲本發大阪歸着午後八時三十分

大正館附近名所舊蹟

郡家から十町余の東方多賀村に老松巨杉蔚然とした神威
自づからこもる官幣大社伊弉諾神社が鎮座します、

伊弉諾神社 は即ち天地開闢の祖神天照大神の父神
である、諾冊二尊の大神が天の浮橋に立ち給ひ天の瓊予を
以て蒼海を探り給ひ、その銚の一滴、一に凝り固り淡路島
を作り給ひ、この島に天降りまして漸次國土を經營遊
された事は日本書記の傳ふことは公知の事である、二神は
功なつて幽宮を淡路島に構へて長く鎮まり給ひたのが即ち
この伊弉諾神社の起源である、古くから淡路一の宮と稱し



官幣大社伊弉諾神社

奉る、歴代の朝廷崇敬厚く神域廣潤にして老松巨杉の巨幹に雜木が鬱蒼とした森殿の淨域である。

(郡家から全淡バス・参宮バスの便あり)

天の下國は多けれき神ろぎの

生みなしませる大八島國

本居宣長

早良親王陵

は伊弉諾神社東南五丁のところに丘状をなして松杉參差し往古は午頭天王を祀つてあつた、親王は桓武帝の皇弟であらせられ延暦年間當地に遁れ給ふた御遺蹟である。

(郡家からバスの便あり)

妙京寺

は郡家より十町余の多賀村にあり、日蓮宗にて郡家城も田村左馬頭春弘の建立にかゝる古刹である。

郡家城跡と城中山公園

郡家城址は今城中山公園となつてゐる、城は永正年間田村左馬頭春弘の築城にて天正年間に修理之進村春が居城し次いで治郎兵衛尉經春の時代に到りて織田信



(城中山公園)

長が武田信玄を攻むるに當り經春に先陣を命じたが經春が信長の暴政にあきたらず虚病をつかつて出陣せず、のみならずその後度々經春が信長の命に従はざることありて遂に信長の怒りにふれ天正九年三月十八日切腹して滅びた一片の哀史を痕する城址である。

今は城中山公園となり大衆の行樂地となつてゐる、山頂の眺望頗る佳く一望萬碧の播磨灘を隔て、遠く四國の連峯を一望の裡に收め關西には稀れに見る逸勝の地である。

荒神山

郡家は往昔屯倉を置かれ或はまた郡衛の所を地とも思はれて早くから郡家は文化の恩澤に浴せし土地である城中山の山續き荒神山の山嶺に約十五間圓圍の



(郡 家 港 灣)

封土の上に數個の巨岩露出し横穴式の關西では稀らしい古墳がある、先年掘出した祝部土器により奈良朝末期の築造と認められてゐる、山内森巖の氣満ちその展望又格別の趣がある。

淺野公園 淺野村の一角にあり公園内に高さ三丈幅一丈二尺水幅五尺の瀑布あり、四邊老楓繁茂し一名紅葉の瀧とも云ふ初夏の新緑は珍重すべく岩處に高原あり學校生徒又は大団体の運動會には申分なく古來雉子の名稱として名高く萬葉集の歌にも謳はれあり郡家町より約三十八丁余、遊覽の適地たり。

尙其他附近には江井港、五色濱、松帆の浦等の勝地が

散在し半日の清遊の地として最適の佳所が多々あり。

一の宮小唄

宮は伊弉諾

ところは一の宮 ヨイヨイ

祭る神さま

祭る神さま 二柱

サテヤツトナヨイくヨイ

絶勝の淡路郡家へ！

官弊大社 伊弉諾神社御参拜こ

淡路西浦廻遊に

※閑静清潔低廉氣持のよい・美麗な百八十疊敷大宴會場

第四師團・大阪專賣局

指定旅館 會席料理

大正館

大阪遞信局・片倉製糸

※夏は楽しい海水浴に斷然郡家へ！！

郡家町 電話四番

昭和十年六月五日印刷
昭和十年六月十日發行

《郡家の美を語る》

複製

著作者 原 靜 村

嚴禁

《転載を禁ず》

大阪府岸和田市沼町一八五番地

發行兼 印刷人 原 徳 太 郎

大阪府岸和田市沼町一八五番地

發行所 南海新聞社

終

